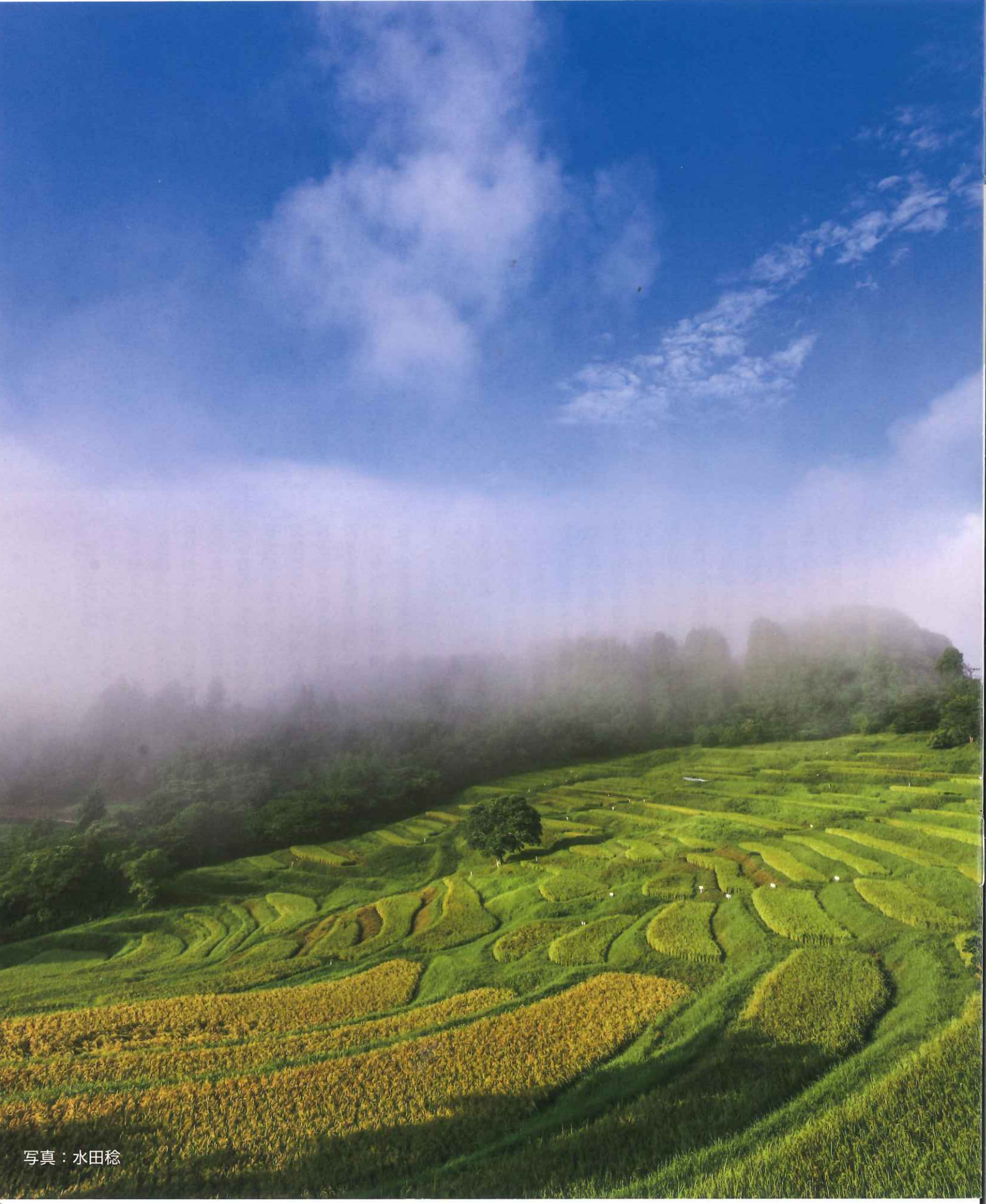


大山千枚田

あんどご通信
第100号
「あんど」とは房州弁で
「かえる」のこと

2024
夏



初めての田植えを終えて

令和6年度田植えが無事終了し、稲は順調に生長しています。
団体オーナーのみなさんに田植えの感想をお聞きました。

雪谷保育園

藤岡潤

田植え体験の際には、丁寧なご指導ありがとうございました。当園は大田区にあります。閑静な住宅街の中にある保育園です。うちの園では毎年、年長児がプランターで米作りを行うのが恒例になっていました。お米が食べられるようになるまでの工程を経験することを食育の目的に行っていました。今回、初めて棚田での田植えを経験させてもらい、自然の豊かさに感動し、また様々な五感への刺激をいただき、たくさんのお物を持って帰ることができました。

保護者会で田植え体験のエピソードなどをお話した際には、昨今の都会育ちのお子さんにはありがたい経験だという声が多く聞かれました。私自身も田舎育ちで田園風景には慣れています。あの棚田の圧巻の景色は今も目に焼き付いています。畦道を歩くことすら楽しい体験でした。

9月にはまた違った棚田の景色と、大切に育てていただいたお米に、目をキラキラさせる子ども達が目に浮かびます。秋にはお米になるまでの工程を子ども達と学び、食の大切さを体験させていたきたいと思います。

あんごの独り言

食料・農業。

農村基本法改正

今年もアジサイの花の季節になった。各地のアジサイ園がマスコミで取り上げられている。花言葉は、花の色が変わることから「移り気」と言われるが、しっとりした雨の中に咲くアジサイは趣がある。アジサイといえば梅雨に咲く花の代表であるが、今年の梅雨入りは例年になく遅くまた明けののも早く、その短い期間の中でも雨量は多くと予報されている。

大山千枚田では基本的に天水に頼っているため重大なことがある。昔より田植えも早く九月初旬までには刈り取りが終わる稲作の体系ではあるが、梅雨明け以降の天候によっては、昨年もそうだったように乾燥や高温障害が発生することが予想される。昔から、自然相手の農業を



なぎさ通り保育園

堀切美来

当園は東京都品川区にあり、近くに大きな田んぼや畑がないため、子どもたちにとって棚田で苗や泥に触れることはとても貴重な機会になりました。都内からバスで向かっていくと、徐々に周りの景色に緑が増えてきて到着する前から子どもたちの嬉しそうな声が聞こえていました。初めて田んぼに入る子が多く、田んぼの中を歩くのは泥に足を持っていかれるので戸惑う姿も見られましたが、苗を大事に持つて植えながら一歩一歩進んでいました。田植えの後に子どもたちに感想を聞くと「難しかった」「お米になるのが楽しみ」など様々な感想が聞かれました。子どもたちにとっても、私たち大人にとっても貴重な体験になりました。自分たちで植えた苗が稲になったときに収穫しに来ることを伝えると嬉しそうにしていました。次の稲刈りでは、子どもたちがどのような発見や体験をできるのかとても楽しみです。



東京都育
楽部うぐ
もす
倶も
田燕ち
つ立
棚立

美原保育園

河内屋喜恵美

当園は東京都大田区にあり、そこで暮らす子どもたちにとって、大自然のなかでの田植えの活動は、貴重な体験ができる機会となりました。棚田の道を虫がいないか探し、坂道で転ばないように気を付けながら移動することも。楽しみながら移動することも。安に思う気持ちなど、一人ひとり違う表情の姿が見られました。いざ田植えを行うと、数人は自分で興味を持ち、進んで田んぼの中に入って田植えを楽しんでいました。そのほかの子どもたちは、少し不安な表情も見られました。

みずなら保育園

山田文香

初めて当園の園児は田植えを経験しました。品川からみんな一緒にバスに乗り、栄養士からお米の話の聞いたりクイズに答えたりしながら、初めての田植えを楽しみに大山千枚田へ向かいました。大自然の中で食べるお弁当は、いつもより美味しく感じられたことと思います。お弁当を食べてからいざ、田植えへ！ 田んぼを前にすると、子どもたちは少し緊張気味でしたが、少

しかし、田植えをしている子が「楽しいからやってみなよ」「大丈夫だよ」と声を掛けてくれると、見ていた子どもやってみようと自分から田んぼの中に入り、田植えを経験することができました。やってみると楽しかったようで、田んぼの中に入った子も誇らしげに最後までやり遂げることができ、自信に繋がった表情が見られました。

その後は、泥遊びをさせてもらい、蛙の成長を観察したり触れたりすることにより命の尊さも知ることができました。田植え後の子どもたちからの話では、一人ひとりが充実感と達成感を味わい、楽しみながら体験ができたように感じました。

しずつ泥に慣れていき最後には率先して稲を植えている姿がみられました。稲を手にとり「美味しいお米になあれ！」「お米を作るのは大変なんだね」などと思いきいお米の話をしているのが印象的でした。普段、食材を作っている人との関わりや、食材がどのように育つかを知る機会が少ない中で、今回の田植えは子どもたちにとって貴重な体験になったと思います。自分たちで植えた稲がどれくらい成長しているか、秋の稲刈りを子どもたちと心待ちにしております。

する中で同じ年は一度もないといわれるように毎年何かしら問題を抱えながら耕作をするのだが、近年ほど大きな変化があり、その対応を求められる時代はなかったように思う。人口減少や極度の高齢化の中で里山の森へのかかわりの減少による鳥獣害も年々厳しさを増している。その上に、人の手には負えない自然現象の追い打ちである。

国は昨今の国際状況を踏まえ、食料の安定供給に不安を抱える中で、食料・農業・農村基本法の改正をした。今後それを実行するための基本計画が作られるのだがより農村、農民に寄り添った実効性の高い計画であってほしいものである。国民の食糧を安定的に確保するには農業を続ける農民がいて安定的に経営が続けられることが必須である。

今回の法改正は、農民だけではなく国民全体が食糧・農業・農村に対し食料安定供給の視点から深い理解を進めるものではない。

(牛太郎)